

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	福井県
-------	-----

I. 学校の概要 (平成15年4月現在)

学校名	上中町立上中中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	0	9	22
生徒数	98	82	101	0	281	

II. 研究の概要

1. 研究主題

確かな学力を持ち、生きる力を備えた生徒の育成

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

習熟度別編成クラスによる学習指導...英語(2・3年生) 数学(2年生)

この二つの教科は、生徒の理解の状況に差が出やすい。個々の生徒の習熟の状態に応じて、学習内容を工夫し、生徒一人一人の学力を向上させるために、習熟度別編成クラスによる学習指導の研究実践を行う。

個々の生徒の能力を伸ばすための指導法の研究...国語、数学、理科、社会、英語

本校の生徒の実態としては、低学力生徒の比率がどの学年とも多い。その原因としては、基本的な生活習慣、学習習慣が身につけていないこと、基礎基本の事項が身につけておらず学習に対する意欲もないことなどがあげられる。また、自分の生き方に関する考えが刹那的で、将来を見据えて今の自分の生き方を考えることができない生徒の数も少なくない。このような実態から、生徒一人一人の発達段階、習熟の程度に合わせ、学習内容・学習の機会を提供することにより、個々の生徒の能力を伸ばし、それぞれが、将来において自己実現を図ることができることを目指して、国語、社会、数学、理科、英語の各教科で研究実践にあたる。

以下の4点を、各教科共通の研究項目とする。

- 単元別評価の実施
- 指導方法の改善
- 努力を要する生徒の指導の充実、能力のある生徒の指導の充実
- 小中高の連携

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ よりよい学習集団づくりとTT学習・習熟度別学習の実施を通して 仮説 よりよい学習集団づくりとTT学習・習熟度別学習の実施により多様な学習が展開でき、確かな学力が身につくであろう。</p>
	<p>□ 研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学級担任による多様な指導法展開のための学習集団づくりの研究 ● 選択教科における習熟度別学習の実施と必修教科における習熟度別学習の計画・準備 ● 研究主任会開催による基礎・基本の指導のための小中連携教育の推進

平成 15 年 度	<p>テーマ 個々の生徒の能力を伸ばすための指導法の研究と習熟度別クラス編成による効果的な学習指導の工夫</p> <p>仮説 個々の生徒の習熟の状態に応じた教材開発と指導方法、及び習熟度別クラス編成による効果的な学習指導を工夫することで、生きる力に結びつく確かな学力が身につくであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 頻繁な授業研究会の実施 ● 必修英語と必修数学の時間での習熟度別クラス編成による授業実践と研究 ● 単元別到達度評価テストの実施 ● 低学力生徒への指導の工夫...授業時と課外の時間での指導体制の確立 ● 能力ある生徒への指導の充実 ● 発展的学習教材の開発 ● 数値目標の具体的設置（学力、学習意欲、教科への興味関心等） ● 学級集団作りについての研究実践
--------------------	---

平成 16 年 度	<p>テーマ 個々の生徒の能力を伸ばすための指導法の研究と習熟度別クラス編成による効果的な学習指導の工夫</p> <p>仮説 個々の生徒の習熟の状態に応じた教材開発と指導方法、及び習熟度別クラス編成による効果的な学習指導を工夫することで、生きる力に結びつく確かな学力が身につくであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 必修英語と必修数学の時間での習熟度別クラス編成による授業実践と研究 ● 各教科（国語、社会、数学、理科、英語）の研究実践の共通課題 <ul style="list-style-type: none"> * 数値目標の具体的設置（学力、学習意欲、教科への興味関心等） * 教材開発 * 単元別評価の実施 * 指導方法の改善 * 低学力生徒の指導の充実、能力のある生徒の指導の充実 * 小中高の連携 ● 研究成果の普及 <ul style="list-style-type: none"> * 頻繁な授業公開 * ホームページによる研究成果・資料の提供...ホームページの充実 * 研究成果報告会の開催
--------------------	---

(3) 研究推進体制

研究組織

- ◆ 研究推進委員会（校長・教頭・教務・研究主任・各部長）
- ◆ 研究部 A
 - 教科指導研究部—各教科部会 構成...教科主任
- ◆ 研究部 B
 - 学級活動研究部（学級経営、学級活動、道徳、総合的な学習の時間他）
 - 調査分析部（調査・分析・提言・インフラ整備）
- ◆ 研究部 C
 - 生徒指導部
 - 生徒会
 - 読書活動推進部
 - 情報教育推進部

研究体制上の工夫

- 研究組織は、実践面に力をいれるため、昨年度の組織を大幅に変更、一新した。

- 教科指導研究部—各教科部会を、研究推進のための中心となる部会と位置づけた。
- 研究部Bには、学級活動研究部と調査分析部を置き、全職員の半数ずつを各部会の所属とした。また、研究部Cには、本校の校務分掌上の組織も研究組織に組み入れた。教科面の指導からだけでなく、学校の教育活動全てを通して学力充実をめざす体制を取った。

III. 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 英語科

習熟度別少人数編成クラスによる授業実践

- ねらい・・・生徒の習熟の程度に合わせて学習内容をデザインし、基礎的・実践的コミュニケーション能力の育成と定着をはかり、個々の能力のさらなる育成をはかる

■ 習熟度別クラス編成による授業実践の方法

1. 単元の学習を、通常のクラス編成で学習する。
2. 単元の学習終了後に、単元の評価テストを行う。
3. 単元の評価テストの結果により、習熟度別クラスによる授業を実施する。評価テストの結果がA判定の生徒は発展コース、C判定は基礎コースを履修する。B判定の生徒は発展コースか基礎コースのいずれかを選択して履修する。基礎コースは単元の基礎事項の復習を中心に、発展コースは発展的学習内容を中心に学習する。習熟度別編成クラスによる授業は、単元毎に2～3時間行う。

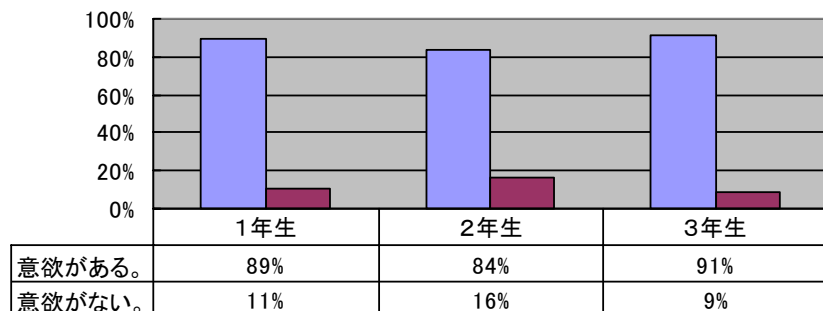
■ 成果と課題

- 発展コースにおいては、かなりレベルの高いコミュニケーション活動ができ、能力の向上がはかれた。
- 基礎コースにおいても、学習意欲を喚起し、力を伸ばすことができた生徒も現れた。

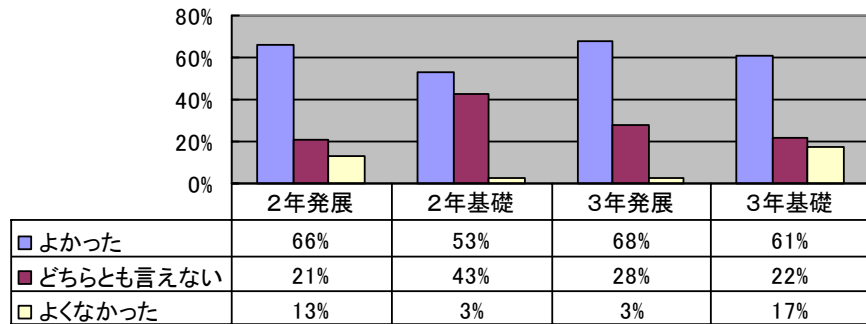
基礎コースの生徒に劣等意識が生じる危惧が感じられる。

学習習慣が身に付いていない生徒、英語に限らずすべての教科について基礎学力が十分ついていない生徒、生徒指導上問題を抱える生徒については、基礎コースの学習においても、指導がかなり困難であり、指導の効果を上げるためには学級担任との連携が必要である。

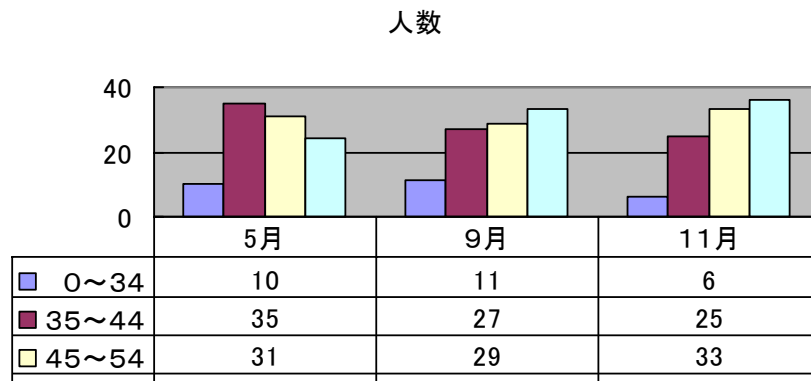
◆ 英語学習についての意欲



◆ 習熟度別編成クラスによる英語についての生徒の反応



◆ 3年生のテストの結果・・・偏差値分布の推移



補助教材の開発

英語文例集“English.Com”（音声 CD 付 3 枚組）

英語文例集は、1：文レベルの文例リスト（文法事項により分類）2：文章レベルの文例リスト（意見文、日記など文章を書くための文例）3：会話表現（スキット形式）の3つの部分から構成し、授業や補習、家庭学習での使用を目的に編集した。内容は基礎的事項から発展的学習内容まで幅広くカバーしている。英語学習のねらいや学習方法、評価方法についても説明をつけ、授業や補充学習の他、生徒の自学自習用の教材としても利用できるものとした。今年度より全生徒に配布し、授業等で利用しているが、基礎的な文法事項の習得、英作文能力の育成に役立っている。

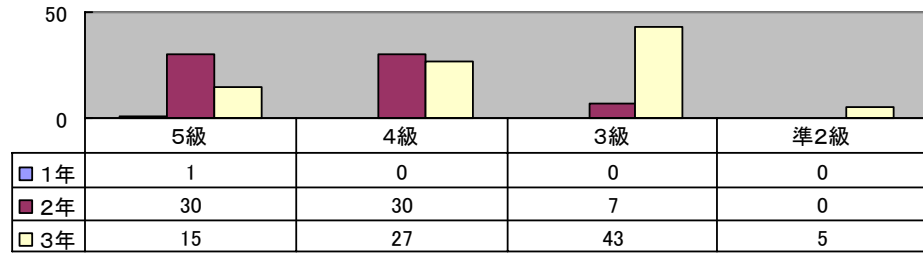
発展的学習及び補充学習の取組み

授業及び放課後等課外の時間を利用して、海外の学生との交流活動、英語検定試験、英語スピーチコンテスト・ホームページコンテストへの応募など、様々な学習機会を生徒の能力に応じて提供し、学習刺激を与えながら個々の生徒の能力の育成を目指して取り組んできた。また、HPでの掲示板を利用し個々の生徒の自宅学習を支援するシステムを構築した。

- 英語検定団体賞受賞
- 国際コミュニケーション基金HPコンテスト優秀賞受賞（中2生徒）
- 福井県英語弁論大会3位入賞（中3生徒）
- 育英会レシテーションコンテスト（北陸3県）優秀賞受賞（中1生徒）

◆ 平成15年度 英語検定試験の受験結果 平成15年11月現在

人数



(2) 数学科

・必修教科における指導方法の改善と工夫

1. 授業における基礎内容の繰り返し学習による定着の工夫（1年）

ア) 授業の最初の小テストの実施

できなかった問題は何度もプリントに登場させることによって繰り返し練習をする。これを行うことによって、静かな雰囲気の中で授業が始められ、どの生徒がどの問題ができていないか確認でき、積み上げれば問題集1冊分の練習量になる。現在のプリント番号はNO. 75であり、NO. 100まで行う計画である。

イ) 授業の終わりの確認学習の実施

TTを利用し、2箇所に分かれて本時の学習内容についての理解を確かめる。ノートの丸つけをしたり、用語理解の確認のための質問を投げかけたり、教師の前で操作活動をさせたりすることによって、今日学習したことを今日身につけさせる。

小テストや確認学習に時間がかかりすぎ本時の展開の時間が少なくなり、進度が遅れているのが現状である。このための外出しの時間の確保が必要である。

2. 習熟度別学習による個に応じた指導の工夫（2年）

学年が進むにつれて既習事項の理解の差が大きくなる教科である。個に応じるには、コースの多い方がよいという考えで進んでいる。

ア) 内容による習熟度別学習の実施

基本は学級での一斉指導におき、努力を要する生徒には理解が困難である内容、能力の高い生徒には難易度の高い課題が設定でき、いろいろな学習形態のとれる小単元を選び習熟度別学習を実施した。本年度は、連立方程式の利用、一次関数の利用、平行四辺形の性質の3単元で行った。習熟度別学習では生徒の集まり方による雰囲気があり、この程度が適当であると考えた。

イ) コース別のワークシートの作成

教科書の使用は義務付けられているので、逸脱した課題設定ではなく、数値の与え方、具体的事例の導入などを工夫し、コース別のワークシートを作成した。担当がそのコースの生徒の実態をと捉えて作成したものであり、来年度もそのワークシートがそのまま使えるというものではなかった。

ウ) 本時の展開におけるいろいろな学習形態の実施

学級での学習では時間数の関係や生徒の構成によりできない学習形態を習熟度別学習では可能である。基礎コースで具体物による演示や個別指導の時間の確保ができ、発展コースではグループ学習や教育機器を使った発表などを取り入れることができた。

・選択数学における教材開発とその実践

1. 上中数学検定の教材作成とその工夫

選択教科の時間を上中数学検定のための学習の時間(学習の振り返り、難問挑戦等)とし、次のような意図で問題の作成を行った。

目的	工夫内容
教科書の内容理解が不十分な生徒に対して、週3時間+ の練習時間を確保する。	選択教科の時間を利用し、学習課題プリントの①を教科書程度の問題とする。
生徒が、今までの学習を振り返り、自分を見つめ、自分の弱点をしっかりと練習していこうとする態度を育成する。	その級の学習課題プリントすべてを最初に示し、合格するための計画を立てさせる。
数学は式と計算・方程式・関数・図形と範囲が広く、また、小学校の内容から中3の内容まで難易度の差も大きい。これを、簡単なところから振り返りたい、難しい問題に挑戦したい、自分の弱い領域を時間をかけて復習したいと考えている生徒の意欲に答える。	1～10級まで、各級4領域の学習プリントを用意する。インターネット上にアップし、家庭でダウンロードして学習できるようにする。②には入試問題等の難易度の高い問題を用意する。
検定試験制度を導入して合格者を賞賛し、学習意欲を高める。	合格のしおりを各級ごと用意し、10種類の合格のしおりを獲得することを目標とさせる。
基礎・基本の定着のための繰り返しの場を設定する。	朝学習、基礎コンテストの内容をこの検定にあわせ、連携を図る。

2. 本年度2学期の学年別取組状況（カッコ内は合格者数）

	第1回目（11月） 全員挑戦	第2回目（12月前半） 個人挑戦	第3回目（12月後半） 全員挑戦
10級	1年93名（58）	1年35名（19） 2年29名（22） 3年20名（16）	
9級			1年91名（65）
8級			1年92名（29）
7級	2年77名（28）	2年42名（9） 3年15名（11）	
6級		3年8名（8）	2年71名（40）
5級			
4級			
3級	3年100名（40）	3年54名（8）	
2級			3年96名（40）
1級			

全員挑戦については5時間使って課題プリントを学習した後、検定試験を行った。また、個人挑戦は不合格者が再挑戦したものと合格者がまだ挑戦していない級を受験したものである。不合格になった級を再度挑戦しても指導の手を入れないとなかなか合格しない。

・学力、意欲・関心・態度についての生徒の変容

1. 期末試験とアンケート調査より

	1年		2年		3年	
	1学期期末	2学期期末	1学期期末	2学期期末	1学期期末	2学期期末
	73.0点	77.3点	68.0点	60.5点	64.5点	69.9点
0 - 19	0	1	7	6	7	8
20 - 39	6	8	4	10	10	9
40 - 59	16	6	11	15	22	12
60 - 79	34	24	22	25	24	16
80 - 100	42	56	33	22	38	56

1・2年生については、分布状態にあまり変化は見られず、中上位層の生徒によって平均が上がっている。それに対して、2年は全体が平均点を下げており、問題の難易度にもよるが授業での理解が不十分であったといえる。

A. 授業の内容は理解しやすいですか？

	理解しやすい	あまり変わらない	理解しにくい
基礎	16	4	4
標準	6	21	13
発展	13	19	4

B. ずっとコース別学習がよいですか？

	1年間コース別がよい	内容にコース別がよい	ずっと学級別がよい	わからない
基礎	8	9	4	4
標準	16	14	5	5
発展	11	19	1	4

このように生徒の習熟度別に対する反応は悪くないので、問題点である各コースとも人数が多すぎるのではないかとこの点を検討していきたい。

2. 上中数学検定より

	1年		2年			3年		
	合格率	平均点	合格率	平均点	合格率	平均点	合格率	平均点
10級	79%	78点	7級	45%	35点	3級	48%	67点
9級	66%	86点	6級	49%	53点	2級	40%	65点
8級	32%	63点						
10級、9級は小学校の内容であり、70%前後の合格率になっている。8級は中学1年の内容であり、冬休みの課題として与えたこともあって合格率は低い。しかし、9級の学年の平均点が86点であるので雰囲気としてはよい。			50%に届かない合格率である。しかし、学年全体の力としては向上が見られる。低学力生徒に目が奪われがちであるが、中間層の生徒の指導が学年全体の雰囲気盛り上げることになると考える。			内容も3年の内容であるので難しいが、受験を控えているので合格率50%以下はさびしい。4つの領域別ごとに弱点を見つけ出させ、その弱点克服指導体制を考えていかないと向上は難しいと考える。		

・その他

1. 中間、期末試験問題の作成と評価について

中間・期末試験については、今までの問題が解ければよいという表現・処理中心の試験から見方・考え方を問う試験への工夫を考えてきた。たとえば、計算の手順を暗記するだけでなく、なぜそうなるのか、既習のどのことを使っているのか、どのような矛盾があるのか、身の回りを見渡すとどのようなことに使えるのかなどを問う問題である。このことは、教師の授業の展開の工夫にもつながることである。

2. 基礎コンテストの実施について

各学年とも数学の基礎コンテストを実施しているが、計算中心の内容としている。1学期はレッスンという問題集を取り上げてきたが、2学期は上中数学検定の「式と計算」と「方程式」の内容を取り上げた。間違っただ問題は、どこで間違っただのか、どのように計算するのかが学習しなければできるようにならない。その時間をどのような形でとるかが課題である。

3. 特別補充学習の実施について

1・2年の努力を要する生徒に対して全教員の協力を得て個別指導する方向が打ち出された。教員1人に2、3人の生徒を割り当て休み時間等を利用して指導にあたるわけであるが難しい面が多い。教師と生徒の時間が合わず、また、多くの生徒は意欲の面で積極的ではないのでうまくかみ合っていない。全員が同じ時間に学習していく中で、低学力の生徒に特別の個別指導をする形でないとうまく機能しないのではないだろうか。

(3) 国語科

、研究主題

「伝え合う力」を育成するための指導方法の工夫（言語操作能力の育成）

、研究内容

- 1, 「話すこと・聞くこと」を重視した授業の指導方法
- 2, 言語操作能力を高める上での基礎的・基本的事項の指導方法
 - ◇ 語彙の獲得方法の工夫
 - ◇ 目的に応じた語彙の活用と表現方法の工夫
- 3, 学校図書館や朝読書と連携した読書指導
- 4, 論理的な思考力を育成するための「書くこと」の指導方法
- 5, 自ら知識を獲得し、内面を豊かにする「読むこと」の指導方法
- 6, 指導と評価の一体化を図る授業方法

、具体的実践内容

1、音声言語活動関係

◇ グループや班活動による話し合いを生かした授業づくり

全体の前で発表する前に班での話し合い活動を多く取り入れた。また、班の構成も生活班に固執することなく、2人～4人構成を主として、自分の意見が反映されるよう心がけた。そのため、全体の前では発言を躊躇する生徒も徐々に発言する姿勢が見られるようになった。

◇ スピーチ、インタビュー、ディベートなど言語活動の場の設定

音声言語活動は、学期に最低1回の割合で行うよう計画した。行う前に、ねらいと評価基準を説明し、明確な目的意識や相手意識を持たせ実践した。また、音声言語活動を実施する場合、的確な評価が難しいため、評価シートを作成し、その場で評価するよう心がけた。

2、文字言語活動関係

ア、語彙の獲得

従来より、授業開始直後に5問テストとして漢字テストを行っているが、本年度から副教材との関連を意識し、家庭学習の進捗と5問テストの内容を合わせる工夫を行った。頻繁な点検作業になるが、宿題を細分化し、教師の気分によって宿題の量が多くなったり少なくなったりすることのないように配慮した。その結果、少しがんばれば満点が取れることが実感でき、意欲的に学習する姿勢が見えてきた。宿題忘れは、クラスで1人～2人程度である。

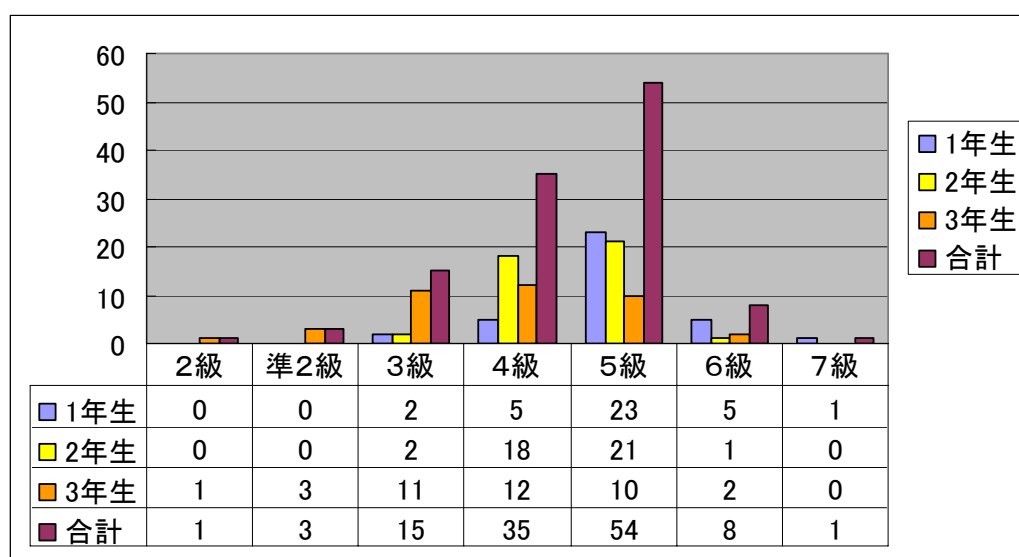
イ、語彙の活用と表現方法の工夫（掲示による活性化）

獲得した語彙や表現技法を用いて表現する場合、必ず作品化することに心がけた。国語科の場合、形として残る作業が少ないため、学習したことが形として残り、自己評価や相互評価が可能ないように努めた。一部の作品はHP参照。

ウ、漢字検定

日本漢字能力検定試験に挑戦する生徒を募り、年3回程度校内で検定試験を実施している。自分で目標とする級を設定し、意欲的に取得を目指して学習する生

徒も多く見られるようになった。漢字の力は個人差が大きいため力のある生徒にとっては効果的な学習となっている。以下に取得状況を示す。



3、読書指導関係

ア、本の紹介（教科書関連作品）

教科書の内容に関連した作品や、同じ作者の別の作品を授業の中で生徒に紹介した。学校図書館にあるものだけでなく、県立図書館からも借りてきてできるだけ多くの作品を紹介できるように努めた。朝読書でそのときにしている教科書の内容に関連した作品を読んでいる生徒や、自己評価表で「この作者のこんな本を読みました。」「このような内容でこんな作品を読んだことがあります。」などといったコメントを書いてくる生徒の姿を見ることができるようになった。

イ、朝読書の徹底

朝読書についての提言を研修会で行い、全職員の理解を得るように努めた。現在は、1年生のみが朝読書を実施している状況であるが、時間になったら机やかばんの中から本を取り出し、自主的に読み出す生徒がほとんどであり、朝は読書をするという習慣がしっかりと付いている様子である。

4、関心・意欲・態度関係

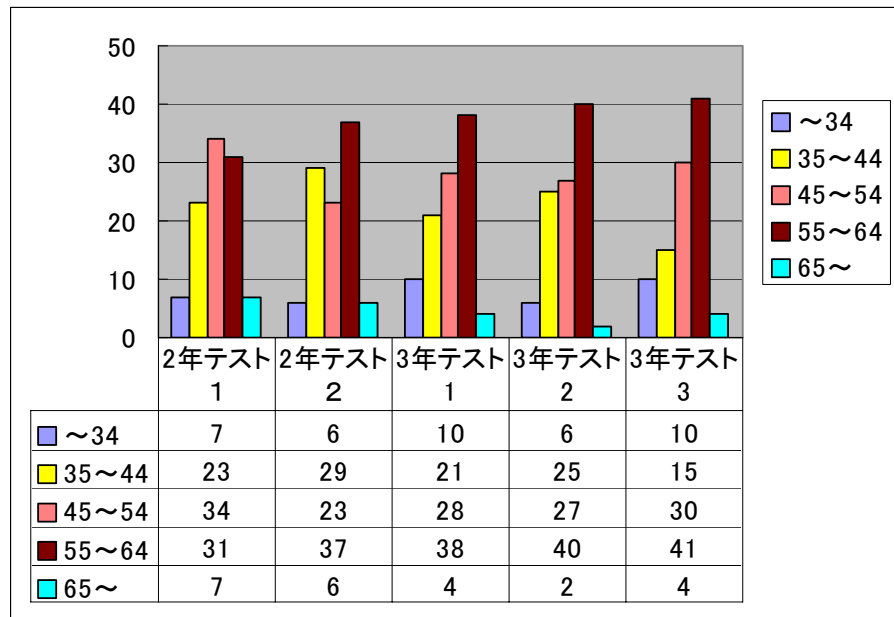
ア、自己評価の徹底指導

自己評価表を用いて毎時間自分の学習態度を振り返らせる活動を行っているが、本年度は特に力を入れた。手法としては、毎時間一言感想を書かせ、教師が粘り強くコメントを返すことである。一言ではあるが全ての生徒に対してコメントすることにより、ほとんどの生徒がきちんと授業についての感想を書くようになった。1学期は、クラスに2～3人の生徒が出さなかったり、ふざけた内容の感想を書いたりしていたが、今ではそういう生徒は見られない。

イ、言語活動の実施

授業前に目標を持たせ、その目標に達するよう読み取り活動を行い、最後に形に残るような言語活動をした。漢文で学習したことを寸劇にする活動や、古文の暗唱コンテストなどの活動をしたところ、普段あまり授業に意欲的でない生徒も、一生懸命取り組むことができていた。

5、テスト偏差値



上記のグラフは3年生のテストの偏差値推移である。2年時の2回と3年時の3回、計5回を集計した。全体的な大きな変容は見られないが、55～64の部分が右肩上がりの傾向にあり、好ましい状況に感じる。しかし、低位の生徒が減少していないことと、上位の生徒が増加していないことが気かりである。今後いかに解消していくかが課題である。

(4) 社会科

1．社会科研究テーマ

「共に生きる社会を創造する社会科学習」

課題を持ち情報を活用し表現する活動を通して意思決定力を育てる学習活動の展開

2．研究内容

- (1) 基礎基本の定着のための指導方法の研究
- (2) 表現活動の重視
- (3) 評価方法の研究
- (4) 発展的学習への取り組み

3．具体的実践事項

- (1) 基礎学力の保障のための指導方法の研究

基礎基本の定着のための方策

ア 5問テストの実施

前時に学習した内容の定着を図るため授業開始時に5問の復習テストを行った。内容は教科書の太字の項目を中心に上げ、授業開始前にしばらく見直すことで誰でも満点をとることが可能なものにした。最初のうちは教師が出題したが、慣れてくるに従い、学年によっては生徒に出題させた。出題するためには内容を理解している必要があり、より確実な理解を促すことが目的である。

イ 確実な復習の実施

学習した内容をその日のうちにしっかりと復習し、内容を整理して理解していくために、副教材のワークの該当ページをその日の宿題とした。1日にやらなければならない量はそれほど多くないため、生徒にとっても無理なくこなすことができたようである。

ウ 単元ごとの復習テストの実施

以前から単元終了時に、復習テストを実施するようにした。

授業形態の工夫

ア ささまざまな単元における調査活動の展開

社会科の学力について考えた場合、重要な位置を占めるのは課題に対して自分なりの方法で調査を進めることができる力である。分野を問わずさまざまな単元で調査活動を行うことによって、資料を活用し、課題を解決していく力が身につくようにした。また、図書室、コンピューター室、校外での調査など、活動の場所を広げることで、生徒の学習意欲が高まるようにした。

イ 多様な発表形式の導入

ディベート、シンポジウム、ポスターセッションなど、多様な発表形式を取り入れることで、生徒の興味・関心を引き出し、情報伝達能力を育成することを図った。

(2) 表現活動の重視

各自が考えたことや調べたことを互いに表現し合う場面を多く設定し、生徒が主体的に活動する授業の展開を図った。

調査した結果のまとめ方、発表の仕方の工夫

ア 班ごとに調査 模造紙にまとめて発表。ポスターセッション形式で発表。ディベート。

イ 個人で調査 画用紙、A3用紙などにまとめて発表、掲示。

相互評価の導入

発表を聞いて声の大きさ、わかりやすさなどの観点で評価を行うとともに、一言コメントを書かせ、聞き取る能力の育成と発表内容の改善を図った。

(3) 適切な絶対評価につながる評価方法の研究

評価規準の再検討

昨年度作成した評価規準を再検討し、より適切な評価ができるものに修正した。1時間ごとの重点評価項目の検討

毎時間4観点すべてを評価することは難しいため、1時間ごとの重点評価項目を設定し評価を行った。

自己評価カードの活用法の研究

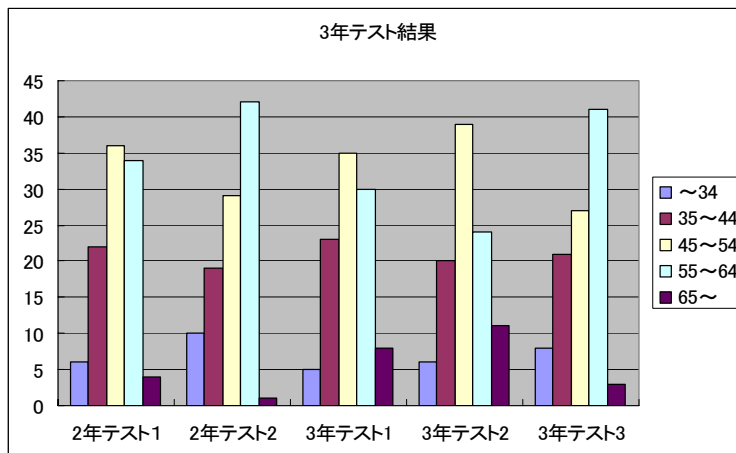
毎時間生徒に自己評価を記入させることで主体的な学習への意識を高めるとともに、教師側の評価の参考資料とした。

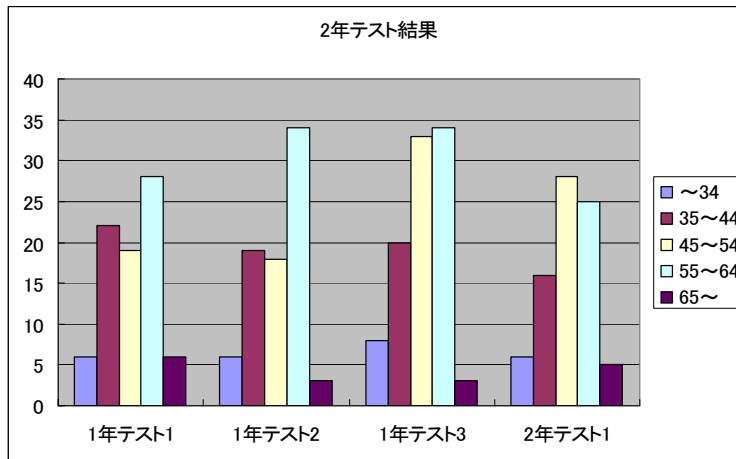
(4) 発展的学習への取り組み

選択社会科において歴史能力検定合格をめざす学習を行った。今年度は第1回検定に23名、第2回検定に38名が挑戦した。

4 研究の成果

(1) 学力の分析





これらは昨年度から今年度にかけてのテストの偏差値の推移を示したものである。

氏名	意欲関心態度			思考判断			
	1	2	3	1	2	3	4
	地図から得られる情報から、歴史的な事象、産業、他地域との関係など、身近な地域への関心が高まっている。	観察・調査をしたり、さまざまな情報を獲得し、地域調査をする意欲が高まっている。	調査したり、発したりして、身近な地域に位置や空間的な広がりなど、地域のかかわりからとらえている。地理的事象を象徴的な位置や空間的な広がりなどを設定し、地理的事象を見だしている。	身近な地域を基に、環境条件や課題を設定し、結びつきを考察し、地理的事象を見だしている。	設定した課題を、地域のをとらえる環境条件や課題を追究するための視点や方法を考察し、適切に選択している。	地域的特色をとらえる課題を追究するための視点や方法を考察し、適切に選択している。	地域的特色をとらえる課題を追究するための視点や方法を考察し、適切に選択している。
****	A	B	B	A	B	B	A
****	B	B	B	B	B	B	B
****	B	B	B	B	B	B	B
****	A	A	B	A	A	B	A
****	C	B	C	B	C	C	B
****	A	A	A	A	A	B	A
****	B	B	B	B	B	B	B
****	B	B	B	B	B	B	B
****	A	A	B	B	B	B	B

各学年ともそれほど大きな変化が見られるわけではないが、どの学年においても若干低位層の割合が減り、上位層の割合が増えている。出題範囲や実施時期の違いなどがあり、単純に比較はできないが、取り組みの成果が多少なりとも現れたのではないかとと思われる。

(2) 生徒の取り組みについて

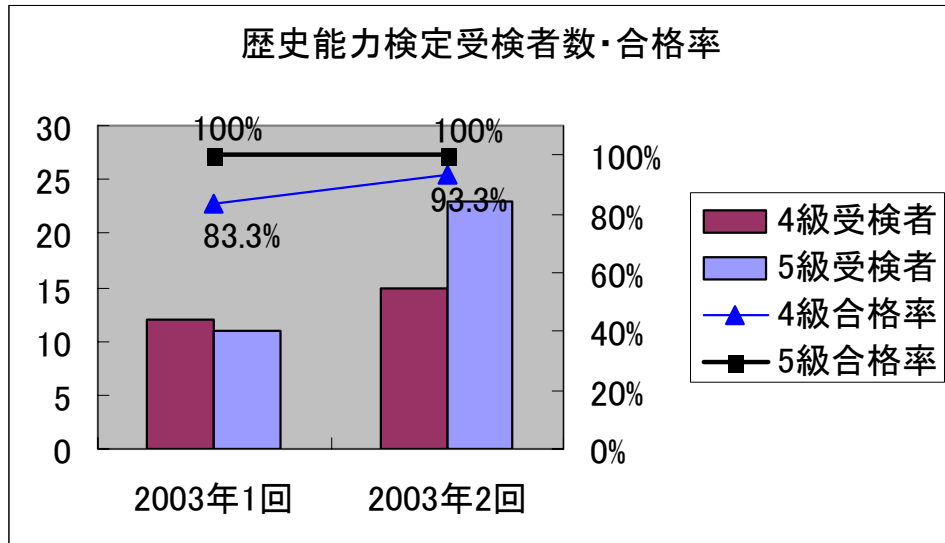
さまざまな場面で調査活動に取り組みさせたことで、調査の方法や効率的な情報収集のあり方、わかりやすいまとめ方などが次第に理解できてきたように思われる。初めのうちはとにかくインターネット至上主義のような考え方が見られ、長い文を入力して検索しようとして何も検索できなかったり、単語で検索して膨大な検索結果に途方に暮れたりしていた。しかし、そのうちより適切な検索の方法を見つけ出したり、書籍を使った方が効率がよい場合があることを実感していった。また、調べたことを吟味せず、難解な語句もそのまま写してしまうことが多かったが、統計資料をグラフ化して視覚的に見やすくまとめる工夫を行ったり、要約してまとめることができる生徒が増えてきた。

(3) 評価について

評価規準を見直し、再構成したことで、学習の実態に合わせた評価を進めることができるようになった。

(単元別評価の例)

(4) 歴史能力検定の結果



5 今後の課題

- 学力向上についてはまだ明確な成果が現れているとは言えない。すべての生徒に確かな学力を身につけさせるため、よりきめ細かい指導をしていかなければならない。特に、地理的分野では指導要領の改訂に伴ってこれまでよりも扱う地域が大幅に減っているが、扱う地域の学習が他地域の学習へも転移していくような指導のあり方を研究していかなければならない。また、学習内容の確実な定着を図るための有効な方策についてもまだまだ研究の必要がある。
- 社会科が苦手な生徒の中には難しい語句が並んでいる教科書に対する拒否反応を示す生徒が多い。本校では映像関連機器が充実しているため、映像教材を開発して視聴させることにより、興味・関心を高め、学習内容を理解しやすくなるのではないと思われる。また、インターネット上のコンテンツをうまく活用していくことも重要な課題である。
- 調査活動を進めていくとどうしても時間がかかる傾向にある。内容の精選を進め、学習時間に余裕を生み出していく必要がある。
- 単元別評価の方法について検討が必要である。本校の評価規準に見合った評価問題を作成し、適切な評価ができるようにしていかなければならない。
- 自己評価については、ややマンネリの傾向が見られる。生徒の学習意欲を高められるような内容に変えていく必要がある。

(5) 理科

研究主題

自然との関わりの中で課題を見つけ、自然事象を主体的に調べ、解決することのできる能力を伸ばす学習指導の工夫 - 問題解決学習を通して生きる力の育成 -

指導の重点

- ・基礎基本の定着を目指す確かな学力の向上。
- ・実験・観察における基礎的操作技能の向上。
- ・科学的表現力の向上。

具体的な取り組み

1. 指導方法の改善と工夫

- (1) 意外性のある演示実験を単元の導入で行いことによる外発的動機付け
- ・カルメ焼き作り
 - ・直列、並列回路における、ワット数による電球の明るさのちがい。

- ・暗室での物の見え方、ストロボ実験
- ・水の中で燃える花火
- (2) 思考力・表現力の向上を目指し、発問の工夫
 - ・既知の事項や体験をもとに、自分なりの考えが持てるような発問
 - ・日常生活の身近な現象を科学と結びつけるような発問。
 - (例)「夕日はなぜ赤いのか」
 - 「鏡が曇ると見えにくくなるのはなぜか」
 - 「真空中を音は伝わるか」
 - 「空気に重さはあるのか」
 - 「霧はなぜ下に落ちないのか」
- (3) ものづくりを重視し、興味・関心を高める中で、思考力を高める工夫
 - ・モーター作り
 - ・花火作り
 - ・水ロケット作り
- (4) コンピュータや情報通信ネットワークを活用した授業
 - ・天文ソフトを使っての天体の日周運動や年周運動。
 - ・リアルタイムの気象情報を活用した天気の実分析、予測。
- (5) その他
 - ・課題(宿題)を授業時間の中でできるだけ行うようにして、何もやらずに済ませる生徒をなくすようにした。さらに課題の確認にも時間をかけることにより、基礎・基本の定着を図った。
 - ・必修教科では、単元によって IT 指導を導入し、一人一人への指導を充実させた。
 - ・実験内容によっては、男女別の班編成を導入し、活動の活性化を図った。

2. 教材開発

原子やエネルギー、天体などのように特に説明しにくい概念を視覚化し、具体的なイメージでとらえられるような教材を作成した。

- ・人原子モデル
- ・うず電流観察装置
- ・エネルギー測定器
- ・公転モデル
- ・ヘッドアースモデル

また、選択学習においては、電流単元のテキストを作成し、基礎的内容、発展的内容について系統的に学べるようにした。

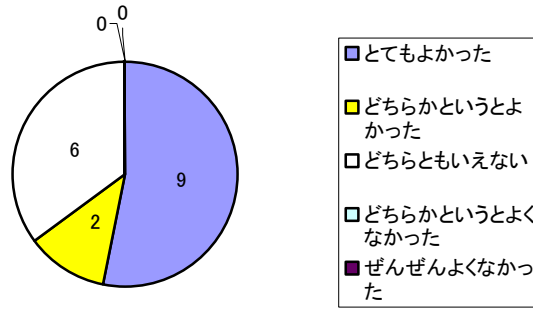
3. 選択教科

選択教科では、本人の希望とプレテストの結果より、基礎コースと発展コースのクラス編成とし、習熟度に適応した指導を行った。

- (1) 基礎コースにおいては、復習的課題を中心に指導し、苦手分野(おもに電流の単元)のつまづきの克服を図った。少人数での指導で、既習事項をじっくりと学習しなおした。
- (2) 発展コースにおいては、教科書の内容に関する理解をより広げたり、深めたり、知的な好奇心や探究心を高めたりするような事項を取り扱った。また、問題解決学習によるレポート作成も行い、充実した内容のものが出来上がっていた。
 - ・電流の正体
 - ・複雑な電流回路
 - ・浮沈子の原理
- (3) 選択理科習熟度別クラスに関する意識調査結果より(第 期)

(問い)選択理科の授業は、基礎コースと発展コースの2つに分けて実施しました。この形で学習することは、あなたにとってどうでしたか。

〔基礎コース〕 17人



〔理由〕

とてもよかった

- ・自分のレベルでやれたと思うし、少人数でやりやすかった。
- ・人数が少なくてやりやすかった。自分に合った課題ができた。
- ・人数が少ないので集中的に学習できた。
- ・今まで分からないところが分かった。
- ・無理なくしっかりできた。

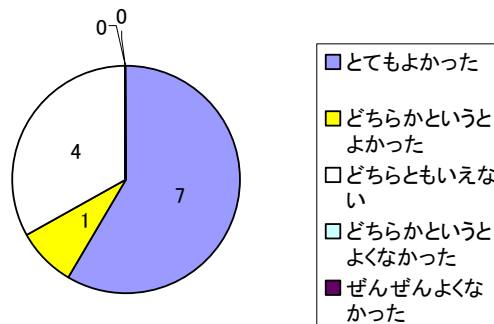
どちらかというよかった

- ・少し分かったような気がする。
- ・苦手なオームの法則もだんだんわかってきて、解きやすくなった。

どちらともいえない

- ・簡単で、少し物足りなかった。
- ・分からなかったことが分かるようになってよかったけど、難しくてぜんぜん分からないこともあった。

〔発展コース〕 12人



〔理由〕

とてもよかった

- ・いい勉強になった。
- ・自分の能力は発展クラスに適していた。
- ・人が少なかったから分かりやすかった。
- ・興味ある実験ができ、おもしろかった。

どちらかというよかった

- ・いい勉強になったと思う。

どちらともいえない

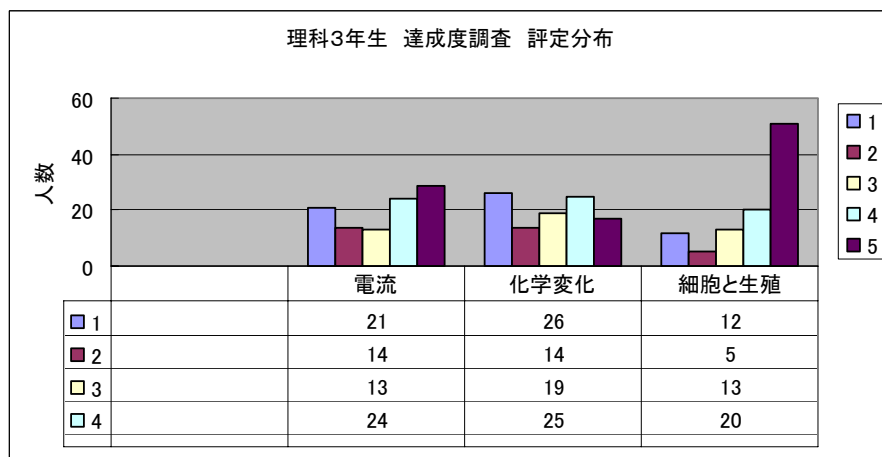
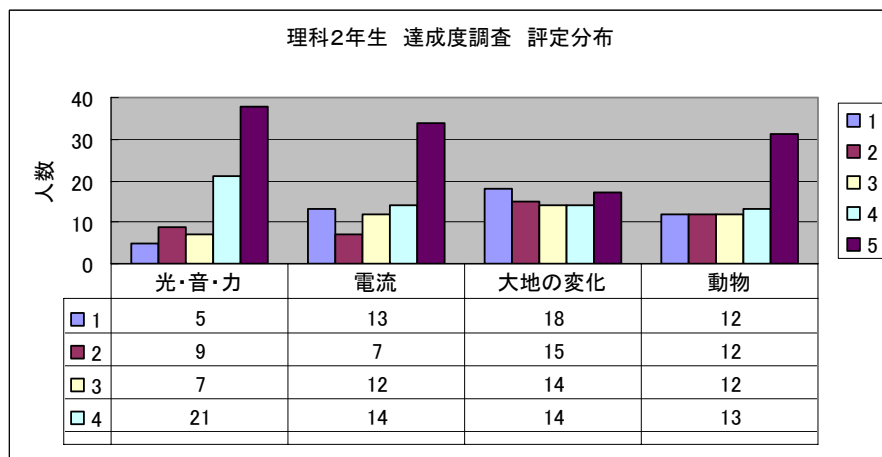
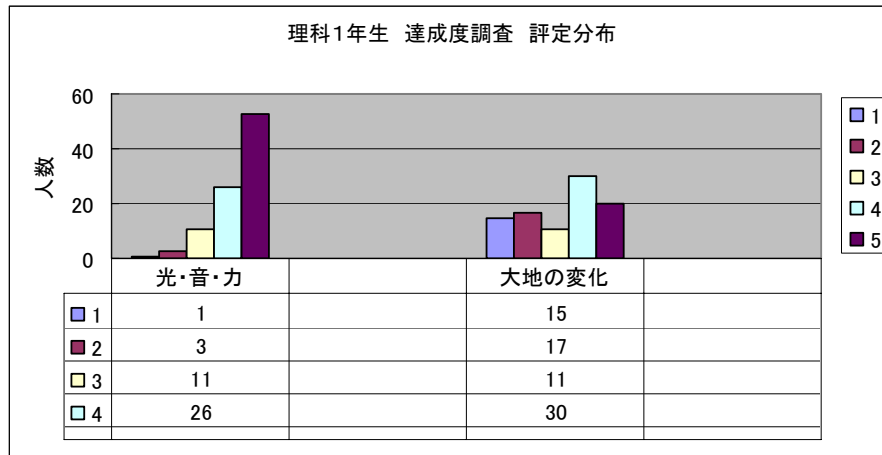
- ・あまりわからなかった。
- ・中途半端だった。

4. 単元別評価の実施

- ・主要な単元で県中学校理科部会作成の達成度評価を実施し、絶対評価やつまずきの発見に活用した。教師サイドでは評定の校内平均が4以上という数値目標を設定し、日頃の指導を行っている。
- ・各単元終了後に、到達度評価テストを行い、観点別達成状況の把握に活用した。各テストの実施により、生徒個々の学力をより客観的に分析できるようになるとともに、日頃の指導の見直しの指針ともなった。

研究の成果

(1) 県達成度調査の結果



単元ごとの難易度の差もあり、単純には比較できないが、同学年で見ると、特に3年生では努力を要する生徒の割合が減ってきている。

単元でみると、「身のまわりの現象」(光・音・力)、「電流」、「大地の変化」等で、昨年度を上回る結果が出ており、取り組みの成果が現れているといえる。

「大地の変化」や「化学変化」の単元は達成率が低く、さらに指導を工夫していく必要がある。

(2) 生徒の変容

- ・実験の考察の内容が充実し、学習意欲に高まりの見える生徒が増えてきた。
- ・興味・関心のある教材を組み入れることで学習意欲の喚起が図れた。また、知識だけでなく、つくる力、創造性、工夫する力を伸ばすことができた。
- ・1、2、3年とも、県達成度の評価の評定4をほぼ毎回クリアしている。
- ・パフォーマンステストの実施により、ガスバーナーや顕微鏡の使い方等、観察・実験の基礎操作の技能が一人一人に徐々に定着してきた。

- (実施例)
- ・ガスバーナーの点火、消火
 - ・顕微鏡の操作
 - ・電流計、電圧計の読み取り
 - ・星座早見板の読み取り

(3) 今後の課題

必修教科においては、時数的な余裕があまりなく、予想 実験 考察というプロセスを踏まえた問題解決的な学習が必ずしも十分にはできず、思考力を十分に高められたとは言いがたい。驚きや発見の場面を多く設けることもあまりできなかった。限られた時間内で興味・関心や科学的思考力を高めるために一層の指導の工夫や教材の開発が必要である。

選択教科においては、習熟度別のクラス編成としたものの、同じコース内でも生徒の能力にかなりの差があり、退屈する生徒や消化不良の生徒が出ていた。コース決定のためのアドバイスがさらに必要である。内容的には、電流の単元を重点的に行ったが、さらに分野を広げていく必要がある。

2. 今後の課題

来年度は、学力向上フロンティアスクール事業研究指定の最終年度にあたる。個々の生徒の能力に応じた学習指導と学力の向上をめざし、以下のことを具体的な課題として研究実践していきたいと考えている。

(1) 各教科での取組み課題

- ◆ 数値目標の具体的設置（学力、学習意欲、教科への興味関心等）
- ◆ 教材開発
- ◆ 単元別評価の実施
- ◆ 指導方法の改善
- ◆ 低学力生徒の指導の充実、能力のある生徒への指導の充実
- ◆ 小中高の連携

(2) 来年度の全体研修会の持ち方について

- ◆ 毎月曜日の授業研究会（兼授業公開）は継続...国社数理英、学級活動
 - 研究テーマに結びつく授業の実施
 - 教科指導の方向性が見える授業
 - 各教科の課題とその日の授業の観点を示した授業
 - 学習指導案の作成にあたっては、単元の指導計画を詳細に記述
- ◆ 全体研修の課題別研修内容
 - 全体研修会は、学力向上フロンティア事業研究推進のための研究を中心にすえながらも、人権、進路、生徒指導、性教育、情報教育、学級経営、学校不適應生徒の指導等についても力を入れ、総合的な職員の指導力の向上をはかる。

(3) 研究成果の普及について

- ◆ 授業公開
- ◆ 学校開放日の設定（保護者、地域の人にも授業の公開をはかる。）
- ◆ ホームページによる実践内容、研究資料の公開。内容の充実をはかる。

(4) 来年度の実践発表の持ち方

- ◆ 時期：11月初旬 後期学校指導訪問日とあわせて行う。
- ◆ 授業公開：数学・英語を含む複数教科
- ◆ 研究報告会：教科別の分科会は持たない。教科を超えて、上中中学校の学力向上フロンティア事業についての研究成果報告会とする。生徒の変容を示すデータの提示（5教科・・・個人追跡、学級・学年追跡）を行う。参加対象は、各学校の教科担当者、研究主任、教務主任とする。
- ◆ 研究紀要は作らない。HPにより情報及び資料提供を行う。

(5) その他、来年度へ向けての実践課題

- ◆ 基礎学力充実対策
 - ✓ 月曜日の基礎コンテスト...年間を通じて継続
 - ✓ 数学特別補習...数学科主導で、現在のマンツーマン方式を年間通じて継続
- ◆ 教育課程の工夫
 - ✓ 現在の3期制の見直し
 - ✓ 総合的な学習の時間、選択教科の時間について、指導形態の工夫、指導内容の工夫をはかり、学習活動の充実をはかる。
- ◆ 学級集団の育成と生徒会活動の活性化
 - ✓ 生徒会組織の見直し...委員会の改変を含み全体的なシステムを見直す。学級や学校の自分たちの問題点を見直し、自分たちの学校生活を自分たちの手で良くしていこうとする活動ができる生徒会の育成をはかる。
 - ✓ 教科担任と学級担任との連携をより強化する。
- ◆ 外部講師・学習支援ボランティアの利用についての工夫

3. 学力把握のための学校としての取組

学力調査

- 各教科共通
 - 新入生テスト...毎年4月中学1年生対象...小学校既習事項の学力把握
 - 定期試験...年間5回(5月、7月、10月、12月、2月)実施...学力把握
 - 県学力診断テスト...11月実施...学力把握
 - 基礎学力コンテスト...毎週...各教科の基礎的事項の習熟状態の把握
- 国語
 - 五問テスト...毎時間...新出漢字、既習漢字の書き、難読漢字の読み、家庭学習の評価
 - 漢字テスト...各単元終了時...言語事項の評価
 - 音読テスト...単元に応じて...音読能力の評価
 - 暗唱テスト...単元に応じて(韻文、古文、漢文単元終了後)...音読能力の評価
 - 条件作文...書くことの単元終了時...書く能力の評価
 - 学習への意欲調査(自己評価)...毎時間...国語学習への興味関心意欲などについて
- 社会
 - 単元到達度評価テスト...毎単元終了時...単元の学習内容の到達度評価
 - 都道府県名テスト...都道府県学習時...都道府県名、県庁所在地名の定着度の把握と定着の徹底
 - 「歴史の流れ」まとめ
 - 「世界旅行計画」まとめ
 - 「日本旅行プラン」まとめ
 - 「身近な地域調査」まとめ
 - 「都道府県の調査」まとめ
 - 「世界の国々の調査」まとめ など

... 各単元学習時...作品とその製作過程を通して思考・判断力、資料活用能力などを総合的に把握
- 数学
 - 小テスト...毎時間...1時間の学習定着状況の把握(1年)
 - 上中数学検定...月1回...4領域別学習定着状況の把握(全学年)
 - 見方・考え方質問...テスト後...見方・考え方等の質問を反省ノートに(全学年)
 - 意識調査...適時...学習への取り組み・意欲等の調査(全学年)
- 理科
 - 達成度の評価...年間4回実施...単元ごとの観点別到達度評価
 - 観点別到達度評価...毎単元終了時...単元ごとの観点別到達度評価
 - 5問テスト...毎時間...前時の復習、基本事項の定着
 - パフォーマンステスト...適時...実験・観察における基礎操作の評価
 - スケッチテスト...適時...スケッチ技能の評価
- 英語
 - 県放送テスト...年間5回実施...リスニング能力の到達度評価
 - 県リーディングテスト...年間5回実施...長文読解能力の到達度評価
 - 面接テスト...年間3回実施...スピーキング能力の到達度評価
 - 英作文...毎単元終了時...英作文能力の到達度評価
 - レシテーション...毎単元...音読能力の評価
 - 単元到達度評価テスト...毎単元終了時...単元の学習内容の到達度評価
 - 学習への意欲調査...毎学期...英語学習への興味関心意欲等についての調査

その他

- 基本的な生活習慣・学習習慣についての調査...5月、10月...基本的な生活習慣、学習習慣についての実態把握
- 学習時間、睡眠時間、テレビ視聴時間等についての調査...毎3月...家庭学習時間等の把握
- 心理検査...10月...学校生活意欲等についての実態把握

4. フロンティアスクールとしての研究成果の普及

■ 研究会、公開授業、説明会等の開催実績及び開催予定

月	日	曜	教科等	備考
5	6	火	数学	習熟度別編成クラス授業 3年生
5	12	月	国語	通常クラス 1年生
5	19	月	英語	少人数編成クラス授業 3年生
6	9	月	社会	通常クラス 1年生
6	16	月	数学	習熟度別編成クラス2年生 / 町内小学校6年生部会、小浜市遠敷郡大飯郡の各中学校数学科の先生方参加
6	23	月	理科	通常クラス 1年生
7	7	月	英語	通常クラス 1年生 / 小浜第二中学校・高浜中学校から参観
9	16	火	国語	通常クラス 1年生
10	6	月	数学	習熟度別編成クラス2年生
10	28	火	数学	習熟度別編成クラス2年生 / 数学科学力向上フロンティア事業 公開授業 & 研究報告会
11	5	水	英語	習熟度別編成クラス 2年生
11	10	月	理科	チームティーチング 2年生
11	28	金	英語	習熟度別編成クラス3年生 & 通常編成クラス2年生 / 英語科学力向上フロンティア事業 公開授業 & 研究報告会
1	19	月	社会	習熟度別編成クラス2年生
2	2	月	学活	通常クラス 1年生
2	9	月	数学	習熟度別編成クラス2年生
2	16	月	英語	習熟度別編成クラス3年生

■ ホームページによる研究の成果、資料等の情報提供

上中中学校 HP : <http://www.hokuriku.ne.jp/kaminaka/>

上記ホームページにより、公開授業・研究会の日程、各研究部会、各教科の研究の成果、資料等の情報を提供している。学習指導案やワークシート等については、PDF形式のファイルにて配信している。

■ フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績又は予定

- 基礎学力向上研究協議会 平成 15 年 7 月 10 日 於：県立青少年センター
 - 町教育研究会学力向上推進委員会 平成 15 年 9 月 30 日 於：上中町立瓜生小学校
 - 嶺南地区小中学校教育充実研修会 平成 15 年 11 月 27 日 於：県立大小浜キャンパス
 - 基礎学力向上研究協議会 平成 15 年 12 月 24 日 於：県立青少年センター
 - 教務主任研修会 平成 16 年 1 月 23 日 於：嶺南教育事務所
 - 嶺南教育事務所 教育研究発表会 平成 16 年 2 月 5 日 於：嶺南教育事務所
- 以上の会議、研修会等にて実践発表

■ 研究成果の普及活動の成果（他校への反響等）

本校英語科作成の補助教材“English.Com”（英文基本文例集、CD 付）は、近辺中学校からの問い合わせも多く、他中学校においても利用されつつある。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 1 5 年度からの新規校 1 4 年度からの継続校
- 【学校規模】 3 学級以下 4 ~ 6 学級
 7 ~ 9 学級 1 0 ~ 1 2 学級
 1 3 ~ 1 5 学級 1 6 学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T . T による指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無